



祭壇横には城星学園の設立母体である「扶助者聖母会(サレジオン・シスターズ)」の共創業者で初代総長の聖マリア・ドメニカ・マザレロの額と学園の保護聖人である扶助者聖母子像が置かれた。

城星学園創立 70 周年記念ミサ 「自分は大切にされている」と分かるように

2022年11月25日(金)10時から大阪カテドラル聖マリア大聖堂で、城星学園創立70周年記念のミサが前田万葉大司教の司式により行われた。

共同司式には聖ザベリオ宣教会副管区長(当時)のジョヴァンニ・デリア神父、サレジオ会(大阪星光学院中学校・高等学校)の吉田利満神父が駆け付けた。全体で600人ほど参加し、大きなお祝いとなった。

「自分は大切にされている」と分かるように、共に行われた。この日は幼稚園児、小学生、中学生、高校生、保護者の皆様、そして教職員全員で、心を合わせて祈る時間を過ごした。また、70周年を記念して、小学生から高校生の聖歌隊約40人の美しい歌声、そしてパイプオルガンの荘厳な演奏を奉納した。ミサに与った子どもたちは、特別な空間にいられる喜びを感じている様子だった。

以下、前田大司教のミサ説教より抜粋。「城星学園創立70周年、おめでとうございませぬ。城星学園は、カトリックの精神に基づいて『良心的な人間、よき社会人』の育成を使命としています。また、創立者・ドン・ボスコの『教育は心の問題であり、青少年を愛するだけでは足りませぬ。青少年が愛されていると感じられるように彼らと共に生きる必要がある』という言葉を、城星教育の金言です。子どもたちにとって、自分が大切にされていると感じることこそが仕合わせです。そのために、『ともに生きる、ともに歩む教育』が必要なのです。

玉造教会は、城星学園発祥の地であり、『ともに歩む共同体』です。これまでの70年を神様に感謝して、マリア様のように神様を信じて希望のうちに共に歩みましよう。その『共に歩む姿勢(シノダリティ)』こそ、学園の発展につながり、神様、マリア様の栄光にもつながるのです。

「学園の創立70周年を祝うミサ。学園に関わる多くの方々に参加していただくことができ、大変すばらしい時間となりました。皆で心を合わせ、この70年間、城星学園を見守り、いつも私たちが導いてくださった神様、マリア様に感謝の祈りをささげることができました。この70周年を新たな発展に向けての第一歩とし、学園一丸となって進んでいけるよう、祈り続けます。」

主催者の感想
「学園の創立70周年を祝うミサ。学園に関わる多くの方々に参加していただくことができ、大変すばらしい時間となりました。皆で心を合わせ、この70年間、城星学園を見守り、いつも私たちが導いてくださった神様、マリア様に感謝の祈りをささげることができました。この70周年を新たな発展に向けての第一歩とし、学園一丸となって進んでいけるよう、祈り続けます。」

(文 城星学園広報担当)



第20回 教区宣教司牧評議会 同じ主を信じて共に歩む

新年を迎えての1月15日、コロナ感染の第8波で懸念が広がる中ではあったが、お互いの配慮によって対面での「教区宣教司牧評議会」が実現した。

新年に当たって、前田万葉大司教を中心に大阪教区の方針を見出すべく、時報1月号掲載の大司教の「新年メッセージ」および共に歩む教会を目指す「シノドス(世界代表司教会議)」の文書を確認しながら、祈りのうちに意見交換を行った。

中でも注目されたのは、新年メッセージの末尾に記載されていた機構改革についての内容で、前田大司教は教皇庁における具体例を示しながら、司牧者と信徒が教会について同等に意見を分かち合うことができ、特に若者たちが自由に、そして自主的に活動を推進していくための環境づくりが重要であると述べた。

シノドスに関しては、すでに、世界中からの意見をまとめた「大陸ステージへの作業文書」が発表されていて、共に歩む教会の姿が全世界を巻き込むものであるとの認識を今後ますます深めさせる流れを感じられた。

これらの発表などを受けてグループ別の分かち合いが行われ、教会の中での司牧者と信徒の関係をより深めるための方法や、地域の中での教会の姿勢、オンライン会議など現代の技術の活用の仕方、分かち合われたものをより多く共同体として共有することの必要性といった意見が活発に交わされていた。

教会は多様性を受け入れながらも、同じ主を信じて共に歩む一つの集まりとして認識される必要性を強く示されているが、それをより象徴的に示す大阪教区となっていくよう、祈りを欠かさず邁進していきたい。(文 宣教司牧評議会 担当司祭 大久保武)

大阪教区修道女連盟研修会 修道女としての「高齢化」 — 現実と希望 —

1月7日、8時半からサクラファミリアにおいて、修道女連盟研修会が行われた。12の修道会、23の修道院から40人の参加があった。研修会のテーマは「修道女としての『高齢化』現実と希望」。講師は、カトリック仁豊野ヴィラ(介護老人保健施設)施設長とドムスガラシア(サービスピッキ高齢者向け住宅)施設長を務める濱口一則氏。

濱口氏は、現在多数の修道会を抱える高齢化と介護に関する資料を多く準備してくださり、グラフを見せながら現状を具体的に説明された。そして、超高齢化にある女子修道会の現実をしっかりと受け止め、「自分たちだけで」考えるのを避け、専門家を交えた体制作りを急ぎ、修道院にこもらず、外へ出て、他の修道会

と連携しながら、たくさん人の声を聴くことを勧められた。また、教皇フランシスコが提唱されているように、社会の人びと、特に子どもたちや周縁にいる人びとの声を聴き、福音の精神に立ち戻り、共同で新しい奉仕職を霊的識別する大切さについて語った。濱口氏からは、最後に「大阪修道女連盟で新しく大胆な

ことを始めませんか？」との問いかけがあった。講話の後は、酒井俊弘補佐司教司式によるミサ。酒井司教はミサ説教で「教会が一つとなるために自分たちのカリスマを使う」という意味について語った。修道女一人ひとりが、最後まで召命を生き生きと生きることのほうが、修道院を

残すことより大事ではないか。それぞれが置かれている場所、今の状況に合わせて自分の召し出しへの忠実を守っていくことができるように共に祈りましよう」と結んだ。(文 大阪教区修道女連盟)



自分より困っている人の話を聞き、分かち合い、大胆な決断を受けいれようと呼びかける濱口氏